第1章 【現代編】「現場的教養」の時代

鷲田清一×大澤聡

鷲田清一（わしだ・きよかず）
1949年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。現在、京都市立芸術大学理事長・学長。大阪大学名誉教授。せんだいメディアテーク館長。臨床哲学・倫理学を専攻。主な著書に『モードの迷宮』『「聴く」ことの力』（以上、ちくま学芸文庫）、『現象学の視線』（講談社学術文庫）、『「ぐずぐず」の理由』（角川選書）など。

鷲田清一さんのファンだという読者はたくさんいる。身のまわりの等身大の出来事や事物から哲学を練りあげていくボトムアップ式が支持されているのだろう。国語教科書に採用されたり、入試問題に頻出したりといった事情もそこからきている。理論や学説をはるか上空から投下するのではなく、ほうぼうの現場に出向いてしっかりと「聴く」ところから出発する。そして、いっしょに考える。それが鷲田さんの「臨床哲学」の基本だ。

大学に幽閉された哲学を日常や生活へと奪還する。そのための試みをいろいろと継続してこられた。連載中の「折々のことば」はその究極態といってもいい。ぺらいSNS文化に対抗するように、おなじ短いフレーズでも濃縮された一文を膨大なアルシーヴのなかから抜きだす。これまた短い解説によって前後左右をくみとらせる。対話の起点にもなれば、新たな読書への導線にもなる。このスタイルには「新しい教養」のヒントがあるんじゃないだろうか。そこで、第1章では鷲田さんとともに、現代社会と教養の接面の周囲をめぐって対話していく。事前にお伝えしたキーワードは「対話」と「現場」だ。

ところで、この対談は鷲田さんが学長をつとめる京都市立芸術大学で収録された。9月中旬のまだまだ暑さの残る某日、キャンパスを散策しつつ学長室へとむかった。その途上そこここに、謎の建築物や制作途上のオブジェ、そのための道具や材料が大量にころがっていた。秋に学祭をひかえているのだという。そんな「つくる」に満ちた空間は、対談の進行に思いがけず陰に陽に影響している。（大澤 聡）

1　リーダー・フレンドリー？

大澤　鷲田さんの『じぶん・この不思議な存在』[★1]のなかにこんなくだりがあります。ふだん、私たちは胃の存在なんて意識していない。不具合が生じてはじめて意識する。それとおなじで、「じぶんとは何か」という問いも「じぶん」が衰弱しているときにこそ浮上してくるのだと。これは今回のテーマである「教養」についてもいえるんじゃないでしょうか。二〇〇〇年代以降、「教養」をテーマに掲げた書籍や雑誌の特集号がたくさん出ました。この一五年のあいだ、ずっと「教養、教養、教養！」と叫ばれつづけてきた。裏をかえしていうと、これは教養が危機に瀕していることのあらわれなのでしょう。

鷲田　よく「教養ブーム」といわれますね。けれど、ブームというわりにはなんだかスカスカなイメージが僕にはある。とくに、書店で新書の氾濫[★2]を目にするときにそれを感じます。

大澤　むかしだったら総合誌や論壇誌が特集化したであろうテーマを、いまは雑誌が機能しないものだから、新書というパッケージが肩代わりしている。その証拠に、複数の論客の文章を集めた新書だったり、座談会や対談の形式をとった新書だった

★1　**『じぶん・この不思議な存在』**
鷲田清一著、講談社現代新書、一九九六年刊。

★2　**新書の氾濫**
岩波新書（一九三八年創刊、以下カッコ内は創刊年）、中公新書（六二年）、講談社現代新書（六四年）が「新書御三家」とされる中、九〇年代に入ってちくま新書（九四年）、ＰＨＰ新書（九六年）、文春新書（九八年）、平凡社新書（九九年）、集英社新書（同）と創刊が続き、二〇〇〇年代には講談社＋α新書（〇〇年）、生活人新書（〇一年→二〇一一年にＮＨＫ出版新書）、光文社新書（〇一年）、中公新書ラクレ（同）、新潮新書（〇三年）、朝日新書（〇六年）、幻冬舎新書（同）、小学館新書（〇八年）と、大手出版社による新書創刊が相次いだ。

りが増えています。ようするに雑誌的につくられている。

鷲田　読者が自分のものの見方をごそっと入れ替える、あるいはゆさぶる、そんな本を求めているのかというと、ちょっと「？」がつく。

大澤　いってみれば知的サプリですよね。最近、アメリカ外交に関する知識が不足しているから摂取しとこう、みたいな。

鷲田　まさにサプリメント。他者の思考と格闘するというよりは、補足であり補給ですね。

大澤　そして、手軽に取れるだけに、流れ去っていくのも速い。

鷲田　それにくらべて、むかしの新書は体系的でがちっとしていて、けっこうむずかしかったですよ。教養書はそう簡単に歯が立つものじゃなかった。

大澤　その意味での「教養新書」はほとんど絶滅しましたね。かわりに、ビジネス書や自己啓発本、スピリチュアル本がひろく読まれる。

鷲田　いまの読者は自分が日々漠然と感じたり考えたりしていることを確かめるために本を手にしているふしがある。

大澤　すでに知っていることこそを読みたい。むしろ、それだけを読みたい。

鷲田　自分が気づけずにいた視点や認識をあらためて発見するために本を読んでいるわけではないのかもしれない。

大澤　うちの父親がドラマ「水戸黄門」[★3]の最後のほうのシーンだけ見ては、毎回、印籠が出て形勢逆転する場面で溜飲をさげていました。あれも新しい発見や変化があってはむしろ困るわけです（笑）。毎回おなじだからいい。

鷲田　だから、書いてあることの九割が理解できるような本でないと、むずかしくてダメな本だとされる。

大澤　ネット上のレビューで、「むずかしく書いてあって自分にはよくわからなかった。だからこれはダメな本。★2つ」といった評価を見かけますね。むちゃくちゃな論理ですよ。大学の授業で学生たちに指定した課題本に対しても、それとおなじタイプのコメントが出てきてしまう。「リーダー・フレンドリー」[★4]なんていって読者を過剰に甘やかしてきたつけですね。読めない原因は本の書き方の悪さにだってあるから無理して読まなくていいんだよ、という悪魔の囁き（ささや）が誤って浸透してしまった。

略

★3 **「水戸黄門」**
TBS系列で毎週月曜の夜八時に放送されていた時代劇。水戸藩二代目藩主の水戸光圀（黄門様）が身分を隠して諸国を旅し、世直しをして回るというもの。一九六九年に放送が開始され、二〇一一年の終了まで、四三シリーズが制作され長寿番組として人気を博した。

★4 **リーダー・フレンドリー**
(reader friendly)
読者にとってのわかりやすさを優先する書き方の志向性。